

今月のテーマ 聞き方話し方

心で話す

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載します。



え・浅妻健司

私

はしゃべることが、きらいだった。口をうごかして、いろいろなことを話すよりも、だまって本を読んだり、書いたりするほうが、はるかによかった。それに小学生のころは、かるいドモリだった。カが発音がなかなかできなかつた。うけ持の先生からどもらないように、もっとゆっくり話さない」といわれてから、よけい気になって、なるべくだまっているようにした。

その私が三十歳ころから、人の前で話をしなければならぬようになった。これは、たいへんな苦痛だった。似たような経験のある人でなければ、この苦しさはわかってもらえないであろう。ひそかに話しかたの本をよんだり、人の話のしかたをいろいろと調べて、こうでもない、ああでもないと言苦勞するのだった。

話術の先生がたとも、おつきあいをしたりして、人知れず勉強もしたのだったが、それでも話のしかたは、なかなかうまくはならなかつた。

それでけつきよくゆきついたところは、話しかたもたいせつではあるが、内容なのだ。まごころがあるかどうかで最後がきまるのだというのである。これもじつは話しかたの先生がひとしく、説いておられるところなのであって、かくべつ新しいことでも何でもないが、やはりその平凡なところに、いちばんだいじなものがあるのだと思うようになった。全日本労働総同盟会長の滝田実さんが、立て板に水の弁舌もよいが、それ以上に「心で話す言葉」のほうがいいとせつで、人間は理で勝って感情で反ばつを受けては何にもならない。私心を捨てた「心の言葉」。こそ組織に血を通わせるものだ……といっておられるのを読んで、それはそのとおりだと思ふようになった。

こののべてしまえばかんたんであるけれども、それではどうしたら、まごころになれるのか。どうしたら内容がしっかりするのか。どうしたら心で話す言葉が口から出るのか。こうしたことは、じつさい問題として、かんたんにはゆかない。まごころだ、誠意だといつても、それがむなしく自分にはね返ってくることを、話以外のこと、つまりじつさいの仕事にあたってあるときなど、人は経験するのではあるまいか。

アメリカのルーズベルト大統領は、一分間の演説をするのに一時間かけて原稿をつくつたという。大統領になったとき、新聞係秘書官から「明日の歓迎会で演説してもらいたいと主催者から頼まれた」といわれ「今からまだ二十時間あるから、十五分くらいならやれる」と答えた。つまり、五時間を休養にとると、十五時間かければ十五分くらいの話ならできるという意味である。これだけ時間をかけて準備をするというのが、つまりまごころなのであろう。

行きあたりばったりでよいこともあるうが、きめられた話には、それだけの準備をし、苦勞をするということが誠意になるのだ。このあたりに、たいせつなものがあるのではなからうか。

『まごころで生きる』新世書房より